

ゆのしらせ

発行・企画
加賀片山津温泉総湯公園5・8・11・2月
年4回発行
(発行月の下旬頃発行)本紙に関するお問い合わせは
加賀片山津温泉総湯公園
TEL 0761-74-0550ホームページ
<https://sou-yu.net>

「総湯（そうゆ）」ってなに？

当地域では当たり前前に使用する「総湯（そうゆ）」という呼称ですが、当地域以外にお住いの方にはあまりなじみのない言葉です。全国的に見ても「総湯（そうゆ）」という呼称を用いている地域は少なく、その地方特有の方言の一種のようなものです。当地域で使用される「総湯（そうゆ）」という呼称について、その意味や使われ方について触れてみます。

「総湯（そうゆ）」が指し示すものは？

「総湯」という言葉を説明する場合、後述の様に説明されます。

「総湯は温泉街・温泉地などで共用で用いる浴場。共用の湯。温泉場で旅館などの施設の外にある共同浴場。」

また、旅館等の「内湯」に対し、「外湯」としての意味を持ちます。

つまり、温泉地で温泉を楽しむために、広く利用者に開かれた共同浴場という意味で使用される言葉です。総湯は立ち寄り湯として広く多くの利用者が使用することができ入浴施設という意味合いが強い言葉です。

また、このような意味で広く「総湯」という呼称が使われているのは、主に北陸地方であるとされ、方言の一種と考えることもできます。

片山津温泉総湯の歴史と役割の変化

片山津温泉が発見されたのは、藩政時代の末期ごろといわれています。開湯以来、「総湯」は時代とともにその役割も移り変わり、今日にいたります。

元々の「総湯」は現在のようない共同浴場という役割よりも、旅館の外湯という役割が強いものでした。温泉宿の宿泊客は、入浴のため、旅館の外にある「総湯」で温泉に入浴し、旅館に戻って身体を休めるというのが、温泉地への旅行のスタイルでした。つまり、元々は温泉客が使用する温泉施設としての役割を色濃く持っていたとされます。

時代の変化とともに、旅館へ直接温泉を引き込んだ内風呂の整備が進み、入浴施設を完備した温泉宿が増えて行ったことにより、現在の銭湯に近い共同浴場の様式へと移り変わっていったといわれています。それにより、「総湯」は近隣住民の入浴を支える、生活に密着した一種の社会的なインフラとしての役割が色濃いものへと変わっていったと考えられます。

近年では一般家庭への浴場の設置も非常に多く、「総湯」には、近隣住民の入浴を支える役割以外にも、観光資源としての役割や温泉文化の継承といった新たな役割が求められるようになっていきます。

総湯の法令上の区分

浴場施設には法令上、大きく2つの区分があります。いわゆる銭湯として営業している「一般公衆浴場」とスーパー銭湯などのレジャー要素を含む「その他の公衆浴場」に分かれます。

両者の違いは大まかには、生活に必要な入浴を提供し、地域の公衆衛生を保つ意味を持つものを「一般公衆浴場」、それ以外のレジャー利用目的を含んだ施設を「その他の公衆浴場」としています。大きく違うのは入浴料金で、一般公衆浴場は都道府県条例により入浴料金が定められています。そのため、「一般公衆浴場」に分類される施設はどの施設に行っても基本的には同一の入浴料金となっています。「その他の公衆浴場」は付帯設備や提供するサービスの違いにより価格が設定されていますので、施設ごとに料金は異なります。

「総湯」はいわゆる「銭湯」と同様に「一般公衆浴場」となりますので、公衆浴場法並びに都道府県が定める公衆浴場に関する条例に従って営業を行っています。

また、温泉入浴にかかる地方税の一種である加賀市が定める入湯税については、片山津温泉総湯は一般公衆浴場であるため免除されており、納税の必要はありません。

総湯のお風呂の温度はなぜ熱い？

片山津温泉総湯のみならず、近隣の山代や山中温泉の総湯についても、お風呂の温度は熱めになっています。

総湯のお風呂がなぜ熱いのか、はっきりとした理由は明確になっていません。

短時間で身体を温めることができ、混雑せず多くのひとが使えるよう長風呂に不向きな温度にしたという説や、そもそも、日本人は熱いお風呂が好きだからという説など、諸説様々あるようです。

現在では、総湯は元来より熱いものという、一種の総湯文化や風習の継承により熱めのお風呂となっているといえるのではないのでしょうか。



次回の休館日は

9月22日（木）です

浴場機器のメンテナンス作業のため、終日休館日となります。お間違いの無い様、お願いいたします。